

# 副詞「しだいに」の意味用法の変遷について\*

朴才煥\*  
jhpark7@kgu.ac.kr

## <目次>

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1. はじめに               | 4. 現代の「しだいに」の意味用法 |
| 2. 17世紀以前の「しだいに」の意味用法 | 5. おわりに           |
| 3. 17世紀以後の「しだいに」の意味用法 |                   |

主題語: しだいに(Sidaini)、副詞(Adverb)、意味変化(Meaning change)、古代語(ancient language)、近代語(modern language)、捷解新語(Chop Hae Sin O)、資料的価値(the Value of material)

## 1. はじめに

現代日本語ではやや固い表現の文章語として「段々に」の意味で用いられている「しだいに」が古代語では「順序を追ってするさま。順次。順番」などの意味でも使用されていたことは周知の事実だろう。しかしながら、管見のところ詳しい論が見られない。そこで、本稿では時代順に用例を検討し、副詞「しだいに」の意味用法の変遷を明らかにしたい。殊に、古代語における意味用法に重点をおいて調べてみたい。後掲の用例<1>で示すように変化の可能性の高い時期である17世紀を境に前後に分けて調査してみたい。それは、本稿の重要な目的の一つである『捷解新語』の言語研究資料としての価値を明らかにすることとも関連している。それ故、現代語における「しだいに」についての考察は先行研究の結果をまとめるのに留め、具体的な用例の検討は割愛したい。

まず、次に掲げる『捷解新語』三本の対照例は孤例ではあるが、「しだいに」の意味変化の時期を判断するうえでよい例と言えよう。

\* 本研究は2015年度校内一般研究費の支援によるものである。

\*\* 京畿大学校 人文大学 日語日文学科 教授

<1> ○そさお御ろんしられてもしたいに(즈리)御ろんしらはたかさうこん申まるせうか

(原刊本二、14)

◎そさに御あいなされますにもしゅんしゅんに(즈리)御あいなされましたらはたれかなにと申ませうか

(改修本二、20)

●該当個所なし(重刊本)

上の例は「送使にお会いなされるにも順番にお会いなされば誰が何と申しましようか」の意味で解釈できる。つまり、原刊本の書かれた時までは「したいに」が「順次に、順番に」の意味で用いられていたことになるが、改修本の書かれた十八世紀中頃にはその意味では用いられなくなり、「順々に」に取って代わられたものと解釈できる。

次は、多少長い記述ではあるが、『捷解新語』の対照例をもとに17世紀を境に調査を行う理由について述べたい。

17世紀後半に刊行された『捷解新語』(1676年刊、以下、原刊本と称す)は朝鮮時代における代表的な訳官養成用の日本語学習書で、当時としては画期的な書物と言えよう。<sup>1)</sup> 十巻からなる原刊本の主な内容<sup>2)</sup>は朝鮮通信使の日本訪問時の対話や釜山の倭館での会話など話し言葉で構成されていて、後に、同じ内容の『改修捷解新語』(1748年刊、以下、改修本と称す)、『重刊改修捷解新語』(1781年刊、以下、重刊本と称す)に改編される。改編の理由については改修本の凡例に日本語の急激な変化によると明記されているが<sup>3)</sup>、それだけが原因だとは考えられず<sup>4)</sup>、原刊本の持っている限界による改正であると思われる。著者である康遇聖の日本語習得の時期など<sup>5)</sup>から判断すると原刊本の日本語は十六世紀末期のもの

1) 安田章(1980)「朝鮮資料の史的系譜」『朝鮮資料と中世国語』所収、1-3頁

『通文館志』の記録によると『捷解新語』が刊行される前までは「消息」「伊路波」などの十四種の書物が用いられていたが、『捷解新語』刊行後廃せられたことがわかる。

2) 森田武(1955)『捷解新語』成立の時期について』『国語国文』24巻 3号

(1) 対話体で書かれたもの

(a) 釜山で朝鮮・日本両国の役人の間の来往交渉を内容とするもの

… 卷 一・二・三・四及び卷九前半

(b) 朝鮮使節の日本訪問を内容とするもの … 卷 五・六・七・八

(2) 対話体で書かれてないもの

(c) 日本の国尽くし(地名) … 卷九後半

(d) 書簡文(候文体) … 卷十

3) 「彼語則古今廻異使彼人読之或有不知其為何語者故就其中古今無別者略存之余悉改正所改者十之八九」(傍線筆者)

4) 前掲書1)、143頁

(前掲書)は、以上述べ来たった敬語法の展開から導かれる、話し手の品位と教養とを具体的に示す方向の、いわば、ことばの品格に基づくさしかえが多かったのではないかと想像したいのである。

である可能性が高い。改修本の成立時期からは約100年の隔たりがある。それに、丁度その時は古代語から近代語へと移り変わる時期にあたるので、改修本の凡例の記述を認めるのは妥当であると思われる。安田(1980)は「廻異」の多くは「副詞」が占めるであろうと主張している<sup>6)</sup>。筆者の今までの研究は、改修本の凡例の記述—日本語の変化が改編の理由である—が正しいという前提の下、『捷解新語』三本の対照例から変化の可能性のある副詞を取り上げ、個々の副詞について調査を行ってきた。その結果、研究対象になった副詞の大部分が17世紀を境にして意味用法の変化が生じたことがわかった。本研究の対象となっている「しだいに」もその一連の調査である。以下、順に用例を検討していく。

## 2. 17世紀以前の「しだいに」の意味用法

本章では、17世紀以前の文献における用例について検討してみたい。

その前に、まず、辞書の記述を確認したい。『古語大辞典』(小学館)には次のように出ている。

しだいに【次第に】副 ①順序よく。順を追って。次々。

②だんだんに。徐々に。

次に、『日本国語大辞典』(小学館)の語釈も確認したい。

しだいに【次第】副 ①序列に従って。順を追って。順々に。次々。

②少しずつ目立たない程度に。おもむろに。だんだんに。徐々に。

③時がたつにつれて。時代が下るに従って。

1603年に刊行された『日葡辞書』の語釈も確認してみたい。

Xidaini シダイニ(次第に)少しずつ、あるいは、徐々に

5) 安田章(1996)「捷解新語の冒頭表現」(『国語史の中世』所収)、75-79頁

6) 前掲書1)、134頁

特に副詞の変化は、當代にあつて、著しいと思われ、「廻異」の多くの部分を占めるであろうと考えられる。

上の三つの辞書の語釈から判断すると、初めは「順を追って」の意味で使用されていたのが時間の経過とともに「段々に、徐々に」などの意味に発展していったものと思われる。『日葡辞書』の記述から判断すると17世紀初期にはすでに「順番に」の意味では用いられていなかったものと判断できる。

次に、『栄花物語』の例を示す。

- <2> 関白殿をはじめ、この殿ばらは、薬師堂の東の高欄の下の土に円座敷きて次第に並み居させ給へり。 (巻二十九、たまのかざり、301頁)

上の例は後ろの「並み居る」と呼応していて、「関白をはじめ、殿たちは薬師堂の東の高欄の下の土に円座を敷いて順を追って並んで座っていらっしゃる」と解し得る。つまり、現代語の意味とは違う「順を追って、順番に」の意味で使用されている。

次に、平安期の『今昔物語』には25例見いだされる。その中から5例を掲げる。

- <3> 前ノ庭ニ高キ棚ヲ構テ、其ノ上ニ皆膳へ置テ、礼拝シテ掌ヲ合セテ次第ニ居ヌ (巻三、200.11)
- <4> 数檢非違使・官人等、東西ニ次第ニ着並タリ。 (巻四、39.10)
- <5> 今昔、聖武天皇ノ御代ニ、王衆二十三人有テ、心ヲ同クシテ契ヲ結テ、次第ニ食ヲ儲テ宴ヲ成ス事有ケリ (巻四、88.8)
- <6> 杖ヲ以テ、二十度許ゾ、次第ニ打渡テ、郷ノ者皆呼集テ、彼社ニ遣テ (巻五、43.4)
- <7> 其ノ時ニ、宰相仰シテ云ワク、「汝ガ愁へ頗ル不當ズ、其ノ故ハ、人ノ家ヲ領ズル事ハ次第ニ伝へテ得ル事也。…」 (巻五、148.12)

<3>は「前の庭に高い棚を構えて、そのうえに皆供え置いて、礼拝し合掌して順次に着座した」と、<4>は「数多くの検非違使・官人等、東西に順序正しく居並んで着席した」と、<5>は「今は昔、聖武天皇の御代に、王族二十三人有って、心を同くして契を結んで、順番に食事を用意して宴を開くことがあった」と、<6>は「杖をもって、二十度ばかり、順に打って、郷の者を皆呼び集めて」と、<7>は「その故は、人の家を手にいれるには、正当な手続きを踏んで順に譲り伝えて所有することである」とそれぞれ解釈できる。上に掲げた5例以外の20例も、すべて「順を追って、順番に、順に」の意味で用いられていることから判断すると、12世紀前半頃までは「したいに」が現代のような「段々に」の意味では使用されていなかった可能性があると言えよう。

次に、鎌倉期の『宇治拾遺物語』には4例見いだされる。その中から2例を掲げる。

- <8> 横座の鬼、盃を左の手にもちて、多みこだれたるさま、ただ、この世の人のごとし。舞うて入ぬ。しだいに下より舞ふ。 (3、鬼にらるる事、56頁)
- <9> 久しくもろこしにありて、さまさまの事どもならひつたへて帰りたりければ、御門、かしこき者におぼしめして、次第になしあげ給て、大臣までになされにけり。 (166、大井光遠妹強力事、367頁)

<8>は「順番に下の方から舞う」と、<9>は「天皇、賢い人とお考えになって、順次に官職を昇進なさった」とそれぞれ解釈できる。「舞ふ」「為し上ぐ」などの他動詞と呼応している例である。漸次的に状態が変化するのではなく、「鬼」と「天皇」の意思により動作(事)が行われることを表している。

『保元物語』には3例見いだされる。その中から2例を掲げる。

- <10> 日数つもるままに、都は遠ざかり、遠国は次第に近づきぬ。 (下、新院讃州に御遷幸の事、163頁)
- <11> 暫こそ拳にて打除けれども、次第に力つかれにければ (下、為朝生捕り遠流に處せらるる事、173頁)

上の例は「段々近づいた」「段々力付いたので」とそれぞれ解釈でき、両方とも時間の経過と共に状態が変化する様子を表す現代語の意味用法で用いられている。

『義経記』には1例見いだされる。

- <12> 判官のおはすするところ知らんずらん問はば、知らずと申さば、さらば放逸に當れとて糾問せられ、一旦知らずと申とも、次第に性根乱れなん後は有りのままに白状したらば (巻六、忠信最期の事、247頁)

上の例は「段々正気が乱れて、後はありのままに白状した」の意で、時間の経過と共に変化した状態を表している。

『平家物語』には17例見いだされる。その中から3例を掲げる。

- <13> 入道相国の嫡子次男、左右の大將にてあり。やがて三男友盛、嫡孫維盛もあるぞか

し。かれもこれも次第にならば、他家の人々、大将をいつあたりつぐべし共覺えず。

(卷二、191.7)

<14> 源氏の世になって、東国へくだり、梶原平三景時について、事の根元一々次第に申ければ  
(卷四、289.11)

<15> 沖の方へおよぎけるが、次第に遠くなりければ、むなしき汀におよぎかへる。

(卷九、223.14)

<13>は「友盛も維盛も順々に大将になっていったら」と、<14>は「事件の始まりから順々に申したので」と、<15>は「船が段々遠ざかったのだ」とそれぞれ解釈できる。<13><14>の二例は順を追って起る現象や動作を表すのに対して、<15>は時間の経過と共に変化した状態を表していることがわかる。17例のうち、8例が「順々に」の意味で、9例が「段々に」の意味で用いられている。つまり、13世紀中頃には「順々に」と「段々に」の両方の意味が混用されていたことがわかる。

次に、室町期の『増鏡』には3例見いだされる。その中から2例を掲げる。

<16> 新陽明門院も、初めは御おぼえあるやうなりしかど、次第にかれがれなる御事にて、御ひとり寝がちなり  
(第十、老のなみ、358頁)

<17> この事、次第に六波羅にてたづね沙汰する程に、三條宰相中將実盛も召しとられぬ。  
(第十一、さしぐし、387頁)

<16>は「段々上皇との関係が疎遠になられて」と、<17>は「順次六波羅で尋ねただしてゆくうちに」と解釈できる。前者は「段々疎遠になる」と時間の経過と共に変化した状態を表しているが、後者は「順番に一尋ね糺す」と順次に行う行動を表している。

次に、16世紀末に出された『天草版伊曾保物語』には5例見いだされるが、その中から2例を掲げる。

<18> 或る人、麻の種を蒔くところを見て、燕これをかなしみ合うた。日を経て、次第に苗に生ひ出れば、いよいよ燕これを悲しうだところで  
(燕と諸鳥の事、46頁)

<19> 狐後から石をひたもの取り入るるによって、次第に重うなって、一足も引かれぬによって  
(狼と狐の事、57頁)

上の例は共に「段々一 生え出る」「段々一 重くなる」と時間の経過と共に変化した状態を

表している。

同じキリシタン資料である『天草版平家物語』には9例見いだされる。その中から3例掲げる。

- <20> さすが露の命は消えやらいで、あとは白波にへだたれば、都は次第に遠ざかり、日数やうやう重なれば (巻一、56頁)
- <21> そのち源氏の世になって、頼朝よりたづね出させられて、ことのやうを始めから、次第に語りまらしたれば (巻一、114頁)
- <22> 海上も次第に暗うなれば、名残は惜しけれども、さてあらうずることでもなければ、むなしい船を泣く泣く渚に押し返すに (巻四、319頁)

<20><22>はそれぞれ「段々 — 遠ざかる」「段々 — 暗くなる」と時間の経過と共に変化した状態を表しているが、<21>は「事の様子を順を追って語ります」と順次にやる行動を表している。

以上の調査をまとめると次のようになる。

『今昔物語』の書かれた12世紀前半においては、主に「順次に」の意味用法で使用されていた可能性が高い。そこから「段々」の意味でも用いられるようになり、『平家物語』の書かれた13世紀には混用状態で、どちらの意味用法が優勢であると言えない。それが、16世紀になると「段々に」の方が大部分を占めるようになり、17世紀には「順次に」の意味では使用されなくなったと言えよう。

### 3. 17世紀以後の「したいに」の意味用法

『捷解新語』には、<1>以外にもう1例見いだされる。三本の対照例を掲げる。

- <23> ○したいに(胥胥)なおるやうに御されとも (原刊本三、3ウ)
- ◎したいに(胥胥)なおるやうに御されとも (改修本三、5)
- したいに(胥胥)なおるやうに御されとも (重刊本三、4ウ)

上の例は「段々 — 治る」と時間の経過と共に変化した状態を表している。

<1>と<23>の韓国語の対訳は「차례」「점점」二通りある。『朝鮮語大辞典』で確認したい。

- 차례(次例)(名) ①順番、順序、次第
- 점점(漸漸)(副) だんだん、徐々に、次第に、少しずつ、ますます

次に、『醒睡笑』には副詞の用法の例はなく、名詞の例が1例見いだされる。

<24> 山林に猿どもたはぶれ居たり。十月末つかたにやありけん。柿の熟したる四つ五つ残りあるを「われ食はん、たれ食はん」とくらひては多し、柿は少なし。「所詮年老次第にくらはん」といふ。  
(下、巻六、うそつき63頁)

上の例は「こうなったからには年寄順に食おう」と解釈できる。本稿では「次第」の名詞の意味用法については取り上げないが、名詞の次に来て「順番、順序」の意味で用いられているのは周知の事実である。

『虎明本狂言』には8例(「次第次第に」の畳語形を含む)見いだされる。その中から3例掲げる。

<25> (太郎冠者)くひじゃ、まことにさうであらふ、さいぜんからいごかぬ程に、さりながらくひならはくひとはいはふ事ではなひが、人か、次第に夜もふくる  
(鬼類小名類、くいか人か、127頁)

<26> 又自然人ならはこらゆる事なるまひ(こそこそぐる)次第にびっくりびっくりとしてぎやうぎがくずる  
(集狂言之類、にわう、61頁)

<27> うしろがみがひかれて、くびのほねのいたひほど、みかへりみかへりしてかへれば、次第にかげはとをさがる  
(万集類、ざぜん、236頁)

<25><27>はそれぞれ「段々 — 夜も深くなる」「段々 — 遠ざかる」と時間の経過と共に変化した状態を表しているが、<26>は強いて訳せば「もし人間ならば我慢できないだろう。(くすぐる)順次—くすぐられる時ごとに—姿勢が崩れる」とも解し得るが、「段々—姿勢が崩れる」のほうが自然だろう。

限られた用例ではあるが、17世紀以後の現代語と同じく時間の経過と共に変化した状態を表す「段々」の意味で用いられていることが確認できた。



## 4. 現代の「しだいに」の意味用法

本章では、現代語における「しだいに」について先行研究の結果をまとめるのに留めておく。筆者の具体的な用例検討は次の研究課題にしたい。

まず、『現代副詞用法辞典』の記述を引用する。

状態が少しずつ変化する様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。(中略)「しだいに」は変化のしかたが連続的で、主体が個々の変化には気づいておらず、変化がかなり進んでしまっ  
てから初めて気づいたというニュアンスがある。

次に、森田(1980)は次のように述べている。

**だんだん** 副

物事の状態が少しずつ順を追って変わっていくさま。(中略)

[関連語] しだいに

「次第に」も「だんだん」と同じ意に使われる。文章語ゆえ、やや固い表現、丁寧な言い方に使  
われる。

次に、仁田(2002)には次のように記述されている。

時間の中における事態の進展を表す副詞として、まず進展様態型を取り上げる。〈進展様態型〉  
は、時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化が  
漸次的に拡大していくことを表しているものである。(中略)

「次第に、次第次第に、だんだん(と)、徐々に、おいおい(と/に)、漸次…」 「いよいよ、ますま  
す、どんどん、少しずつ、…」などがある。(後略)

上で見たように、「次第に」などの進展様態型の副詞が生起する事態は、持続性を持った変化で  
あった。

次に、論文で「しだいに」を取り上げた研究として、ルチラ(2008)を挙げられる。ルチラ  
では類義語である「段々」「徐々に」との比較を通して次のように分析している。

「次第に」はゆっくりと開始した出来事が、時間と共に緩やかに展開度合いを増しながら進展し

ていくことを描写する。「次第に」の場合は「だんだん」や「徐々に」に比較すると進展過程の区分は意識されにくく、時間的段階(進展過程の区分)における度合い・量的拡大というよりも、展開度合いの緩やかな拡大が描写される。従って、「次第に」の表す漸次性とは展開の度合いにおける緩やかな拡大と言える。故に、「次第に」は制御可能性と馴染まない意味特徴を有するのである。その上、出来事描写性が高く、典型的には、非意志性自動詞を述語とする文の表す自然の成り行きとしての展開を描写する。

そして、論文の末尾で次のように表にまとめている。

意味特徴	「だんだん」	「次第に」	「徐々に」
漸次性の描写の仕方	時間的段階毎に少しずつ拡大していく進行	時間と共に緩やかに拡大していく進行	時間的区分毎に少しずつ量的に拡大していく進行
意志性述語との馴染みやすさ	中間的	馴染みにくい	馴染みやすい
文体的特徴	口語的	文語的	文語的

以上をまとめると次のようになる。

現代語における「しだいに」の意味用法は類義語の「段々」「徐々に」と違って進展過程の区分は意識されにくく、時間的段階における度合い・量的拡大というよりも、展開度合いの緩やかな拡大を表している事がわかる。

## 5. おわりに

以上、限られた用例による調査ではあるが、まとめると次のようになる。

「しだいに」は12世紀には、「順を追って、順番に」などの意味で、後ろの述語と呼応して順次に行う行動を表す用法でも用いられていたことが分かった。それが、『平家物語』の書かれた13世紀中頃には「段々」の意味と混用され、16世紀になると「段々」の方が大部分を占めるようになり、17世紀には「順次に」の意味では使用されなくなったと言えよう。「改修本」の書かれた18世紀には「順番に、順次に」などの意味では使用されなくなり「じゅんじゅん

に」などにとって代わられたものと思われる。現代語においては文語的な特徴を持って「時間と共に緩やかに拡大していく進行」を表す意味用法で使用されている。

本稿は限られた文献の用例に基づいて行われた調査で、しかも、古代語中心になっている。今後、江戸期以降明治期までを調査対象にして追加研究したい所存である。

### 【参考文献】

- 森田武(1955)「『捷解新語』成立の時期について」『国語国文』24巻 3号  
安田章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間叢書  
\_\_\_\_\_(1990)『外国資料と中世国語』三省堂  
\_\_\_\_\_(1996)『国語史の中世』三省堂  
森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店  
李太永(1997)『訳註捷解新語』太学社  
仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版  
ルチラ パリハワダナ(2008)「副詞「だんだん」「次第に」「徐々に」が表す展開の諸局面」『金沢大学留学生センター紀要』28号  
飛田良文(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版

---

논문투고일 : 2016년 09월 05일  
심사개시일 : 2016년 10월 18일  
1차 수정일 : 2016년 11월 07일  
2차 수정일 : 2016년 11월 09일  
게재확정일 : 2016년 11월 15일

---

---

 <要旨>
 

---

## 副詞「しだいに」の意味用法の変遷について

朴才煥

本稿は副詞「しだいに」に関する通時的観点での調査で、限られた文献の数少ない用例による分析ではあるが、以下のような結論を得ることができた。

「しだいに」は12世紀には、「順を追って、順番に」などの意味で、後ろの述語と呼応して順次に行う行動を表す用法でも用いられていた。それが、『平家物語』の書かれた13世紀中頃には「段々」の意味と混用され、16世紀になると「段々」の方が大部分を占めるようになった。17世紀には「順次に」の意味では使用されなくなったと言えよう。「改修本」の書かれた18世紀には「順番に、順次に」などの意味では使用されなくなり「じゅんじゅんに」などに取って代わられたものと思われる。現代語においては文語的な特徴を持って「時間と共に緩やかに拡大していく進行」を表す意味で使用されている。

## A study on Japanese Adverb [Shidaini]

Park, Jae-Hwan

This paper analyzes limited by the small number of applications in the research literature as a diachronic perspective on 「しだいに」 but had to get the following conclusions.

The 「しだいに」 is the 12th century, “a step-by-step, in order” in the sense of like, was also used in the usage representing the sequentially carried out action in concert with the back of the predicate. It is, in the mid-13th century, which was written with 『平家物語』 is mixed with the meaning of “gradually”. When it comes to the 16th century towards the “progressively” has come to occupy a large part. The primary meaning in the 17th century [sequentially] have. 「改修本」 is written there is true but its role is not used in the sense of [sequentially] 「順次に」 18 century will be judged instead. In the modern languages are used in the meaning of [progress goes slowly expand with time - with octopus characteristics.